



2019. 6. 1

# 地球の木

♥ 地球上のすべての人たちと共に生きたい

地球の木講座

## 「甘いバナナの苦い現実」

### 映画とトーク

地球の木講座は、地球の木の活動の基本にある考え方や私たちとかかわりのある国で起こっている問題、考えなければならない事を皆さんと一緒に考える講座です。

今回4月13日の講座で取り上げたのは地球の木とも縁の深い「バナナ」。沢山の人の参加がありました。

バナナはある年齢以上の人にとっては、幼い日には貴重な心ときめく果物でしたが、今の若い人にとっては、いつでもある季節感のない果物の代表となっているでしょうか。

スーパーや八百屋さんにたくさんの中のバナナが並んでいます。台湾・チリ・エクアドル・フィリピン等、産地はどこも暑い国ですが、日本で今輸入しているバナナの80%がフィリピン産です。

さて、地球の木とバナナには、どんな関係があるのでしょうか。

現在、私たちはネパール・ラオス・カンボジアそれぞれの地域で、困難な状況にある人たちへの支援を行っていますが、1992年から10年ほどフィリピンのネグロス島のバナナ農園やサトウキビ農園の労働者の自立などを支援していました。フィリピンのバナナの支援を始めたきっかけは、私たち地球の木の設立の母体となった生活クラブ生協が、ネグロスのバナナを輸入していたことによりますが、当時何の権利も持たないバナナ農園の労働者たちは飢餓と貧困の中にいました。

私たちがこのネグロスの現地の状況を報告するのに、身近なバナナは不公平な経済優先の社会の仕組みを考えるわかり易い材料でした。そしてより伝えやすい教材を作る模索が始まり、地球の木は「マジカルバナナ」というバナナ農家の現状を知るために開発教材を完成させ、1999年に販売を始めました。現在もこの「マジカルバナナ」のワークショップは、学校や市民団体からの出前講座の要望も多くしばしば開催されています。

地球の木の支援のコンセプトは、お金による支援だけではな

### CONTENTS

■ 地球の木講座「甘いバナナの苦い現実」	1,2
■ fromラオスチーム 応援席からとびだそう	3
■ 「共に生きる」～ノルウェーの深い話～	3
■ ネパールスタディツアーサ幸せ分かち合いムーブメントを体感	4,5
■ 支援地から カンボジア現地調査	6,7
■ 地球の木と私	7
■ 活動日誌	7
■ インフォメーション	8
■ 編集後記	8



埼玉や千葉からの参加者も

く、生産者やそこで暮らす人々の生活や環境が守られるよう社会に働きかけることや、同じ地球市民としてつながりながら、そこで起こっていることを知り、発信し私たちの暮らしのあり方も見つめなおし、変えていくことです。

2015年に国連で採択された新たな開発目標SDGsは、「誰一人取り残さない」ことを目指し、先進国と途上国が一丸となって2030年までに貧困を撲滅し、持続可能な社会を実現するための指針として、17の達成すべき目標を掲げています。その中に「人や国の不平等をなくそう」「陸の豊かさも守ろう」「平和と公正をすべての人に」という目標があります。

バナナの生産者が、搾取されずに自立した生活の中から、農薬を使わないバナナを生産し、安定した生活を営む。そして食べる側の私たちは、適正な価格で安全に作られたものを購入する。私たちが求める姿です。

先進国と言われ、おいしいものを安く買って食べている私たちですが、この映画のミンダナオ島ではどんな人たちがどんな生活をしながら、バナナを生産しているのでしょうか。自分の生活と比べてみると…。そして私たちにできることとは？

(副理事長 成瀬悦子)

## 映画を観て

まず映されたのは小型飛行機からバナナプランテーションに散布される農薬。緑の大地に降り注ぐそれは、霧のようで不気味に黄色い。そして腕や背中、お腹の皮膚障害を訴える男の人。女の子の耳の後ろ全体がただれた痕のようになっているのを見せるお母さん。更には、ポリタンクを指差し「水が汚染され飲めないので買っている。子どもへの影響がすごく心配だし経済的にも大変だ」と言うのは、プランテーションに隣接する村の人だ。また、多国籍企業に土地を貸しそこで働く人が「本当はもう契約をやめにしたい」と静かに語る苦悩に満ちた顔も忘れられない。

映画を観ながら日本のスーパーのバナナ売り場が目に浮かんだ。昔より種類も増え様々なネーミングで平和に並ぶバナナたち。それを買う、多分何も知らない日本の消費者。この落差！

このドキュメンタリー映画は、『バナナと日本人』(岩波新書)から約40年たった今、NGOアジア太平洋資料センター(PARC)がミンダナオ島を再訪して生産者たちの暮らしを見てまわり記録したものだ。生産者をとりまく状況が前とそれほど変わっていないことを知られ、満席の参加者は暗澹とした気持ちになったに違いない。顔の見えない多国籍企業が展開する大農園で、相変わらず理不尽な働き方を強いられているバナナ労働者。問題は複雑で難しい。しかしホッとする場面もあった。農薬に依存しないバナナ栽培を進めている協同組合の姿が取り上げられていた。

世界中から輸入されるモノであふれる一見豊かな日本の食生活だが、こんな風にモノの来た道を逆にたどり生産者に思いをはせると、悩みは深い。

(会報作成チーム 斎藤和子)



問題や労働条件など、犠牲やリスクが伴っています。

1982年に出された鶴見良行氏の『バナナと日本人』。80年代の日本が自信をつけていった時代のこと、多国籍企業に搾取される生産者や農薬による健康被害の問題を明るみにしました。あれから40年近くたちますが、不当な契約や農薬による健康被害を訴える生産者、労働者は存続していました。バナナの輸入業者「スミフル」のウェブサイトに掲載されているバナナ農園の写真や動画には、もちろん農薬や空中散布のことは一切出ていません。<健康な大地で、環境に配慮し、有機にこだわった土づくり…>と紹介しています。それも嘘ではないと思いますが、消費者が好むような情報が流されます。情報はあふれていますが、偏った情報も多く、現実に起こっていることが見えにくくなっているのです。『スミフル』の農園で昨年来労働組合員を狙った事件が起り、死者まで出ました。労働条件改善の要求にも応えてくれないという事実もあります。

◆ ◆ ◆

最後の質問者が、大きな会社の倫理観の無さを嘆きながら、「何ができるのか」と問い合わせました。石井さんは、「あからさまな契約違反や法律違反にはきちんと声を上げていく」「エシカルキャンペーンなどにも賛同して下さい」と答えました。

決して声高にではなく穏やかなトークに共感が持てました。そしてもっと多くの人に聞いてもらいたいと強く思いました。

(会報作成チーム 沼田由美子)

### 〈トーク〉 石井正子さんが語る

この映画の監修をされた石井さんは、「4半世紀にわたりミンダナオ島に通いあ世話になり、ミンダナオ島に育てられました。多くの方の協力でこの映画(DVD)が作られたことに感謝しています」と述べ、話し始めました。

フィリピンの人々にとって輸出向けバナナとはどういう存在なのでしょうか。バナナの栽培面積は2015年現在で横浜市の約2倍(約86,000ha)となり、外貨の稼ぎ手として非常に重要な産業になっており、バナナ産業で生きている人が沢山います。自分たちが消費しないものを大量生産しているわけで、彼らの食文化とは切り離されています。そして農薬の

## プロフィール

立教大学異文化コミュニケーション学部教授。紛争研究と国際協力の研究者。フィリピン南部が主なフィールド。

※参加者の感想などは8ページに掲載しました



## 応援席からとびだそう

ラオスにおいては、日本国際ボランティアセンター（JVC）が行っている「サウンナケート県農村部住民による自然資源の管理・利用支援プロジェクト」（2018年3月から2021年3月）を支援している。地球の木の支援はいわゆる間接支援といわれるよう、地球の木が直接現地に入り、何かをなすのではなく、国際NGOのプログラムを応援するという形で資金を提供しているものだ。

私たち会員や寄付者は、地球の木に年会費や寄付を出すことで国際協力している、貧困の解決や後発国の発展に寄与していると思っている。そして支援を実施している団体からの年次報告書やモニタリングなどで私たちには、進捗状況や提供した資金が有効に使われているかどうかを確認する。現状その通りではあるのだが、会員は応援席から応援しているとしたらもったいない。報告書等の成果や課題として整理されたものの周りに、本当は私たちが知らない事実があるのではないか。例えば報告書に記されているような村の識字率があがったとか乳児死亡率が減ったとかい

うことも重要なことだが、村の人たちのワークもしくはしんどい生活や考えを知りたいと思う。

現場が海外であり、暮らしぶりも文化も異なり想像するにも難しい面が確かに多い。だが、「開発」プログラムで支援や援助の対象になっているのは、私たちとおなじ普通の人たちなのだ。現地の人たちは、日本からやって来て、支援なんて余計なあ世話と思っているかもしれないし、また有難いと思っているかもしれない。

地球の木の会員であるメリットは、その現場情報をお互いの目線で探り合い、国際社会の目線を培うことなのではないか。

ラオスチームでは今年度、JVCの方々の知識や体験をもっと活用して、ラオスの村のこと、暮らし、村人のプログラムへの関わりなどを知る機会をつくる。そして国際理解を進めていきたい。これから「開発」という分野で地球の木目線をより活かすために。

（ラオスチーム 大嶋朝香）

## 「共に生きる」～ノルウェーの深い話～

茅ヶ崎でネパールのワークショップを行った時、参加した幼稚園の園長先生から「最近、ネパールの子どもが増えています。お母さんたちは日本語ができなくて困っているけれど、言葉が通じないので、どうサポートしたらいいのでしょうか」というご相談をうけました。

教育現場はどうでしょう。ペルー人の高校生リスさんは、中学の時に来日。一日6時間、理解できない授業をじっと耐えていたといいます。それで思い出したのが、90年代初めに講演会で聞いた話。ご主人のノルウェー留学を機に、小学生の子ども2人をノルウェーで育てた中田慶子さんの体験談です。彼女の著書『私の出会ったノルウェー～地球サイズの子供たち』を読み返してみました。

中田さんのお子さんたちは、ノルウェー語の特別授業を週4時間、普段の授業でも隣に座ってサポートしてくれる先生



多文化共生をテーマに毎年行われる「あーすフェスタ」(5月18、19日)

がいて、3ヵ月で学校生活に困らない会話力を身につけをそうです。

今も記憶に残るのは、ノルウェーが外国籍生徒の母国語教育を徹底していることです。ノルウェー語で育った子どもとノルウェー語が不自由な親は、親子関係に亀裂が生じ、非行に走ったり、自殺したりする事例が多くあったそうです。この失敗を繰り返さないため、ノルウェー政府は、すべての外国人の

子どもに母国語で授業を受ける権利を保障しているというのです。校長先生から中田さんに提案がありました。「この町には日本語教師がいないので、あなたが学校に来てあたくのあ子さんに日本語を教えてみませんか。報酬は市から支払われます」。外国人や移民の子どもも國の宝として育てるノルウェーの懐の深さ。それは、国造りの根底にある「人権を最優先する」という哲学なのでしょうか。

（会報作成チーム 乳井京子）

# 「幸せ分かち合いムーブメント」を体感



加者4人とマンガルタール村とカトマンズを訪ねました。人々の暮らしを体験したい、貧困の解消や女性の地位向上について知りたい、日本にネパール人がたくさん来ている背景を知りたいなど、その動機はさまざまでした。短い滞在ではありましたが、村と町の暮らしの両方を体験することができただけなく、寺院や祭りなどの伝統文化や人々との交流からネパールを体感することができたことだと思います。

村に入る前に、SAGUNのカマルさんとエソダさんの講義を受けました。ネパールの社会構造や開発の考え方についての話に一同共感を覚えたようでした。経済やインフラの面から見るとネパールは遅れているように見えるが、文化、社会、環境の側面から見ると大変豊かであること。前者は便利さの追求であり、後者は幸せの追求であり、両者のバランスが必要であることを学びました。

最初に訪れたマンガルタール村のラジャバス地区は標高1,600m。丁度エンドウ豆の収穫の時期で、食事にも豆が登場しました。ホームステイ先の先生のお宅では「開発の遅れている村ですが……」と話す先生に対し、参加者が「ネパールの美しい環境や文化は素晴らしいので、なくしてほしくない」と話す場面がありました。

標高900mのピンタリ地区では油を絞る前にナタネの種を干しているところでした。村のある女性が提案して困難の未通した水路のあひで、ここは水が流れる豊かな地域です。小水力発電による粉挽き所や油の圧搾機も見学しました。

カトマンズでは、春を告げる色の祭りホーリー祭や、前教育支援プログラムのパートナーSOARSが育てた協同組合の人たちとの交流もありました。

様々な人たちと出会い、言葉を交わすことで、「幸せ分かち合いムーブメント」の一端を担うことができたツアーでした。  
(ネパールチーム 丸谷 士都子)

## スタディツアー 参加者の声

### ●その村には日本人が忘れてしまった生き方がありました

1本のネパールドキュメント映画がネパールへの興味の始まりでした。そこではゴルカ郡ラプラップ村で営まれる貧しくても穏やかな雰囲気の家族と輝く瞳を持つ子ども達との交流を描いたものでした。今回のツアーでお世話になったラジャバスやピンタリでも地域の人々が寄り添うようにつつましく日々の生活を誠実に生きていました。

無いものが何もない日本で生活している私には、この厳しい自然環境と生活環境で生きていく事を受け入れている彼らの支えは何なのかなと考えてしまいました。不便な事は少なくないですが、この村には今の日本人が忘れてしまった人間本来の生き方を切実に思い知らされた気がします。ラジャバスで伺った村の学校設立の話では、その当時中心となって関わった方の話だったので、話に重みが感じられ頭が下がる思いました。本当にたいへんな思いで奔走した事と思います。山間部の風景は今も心深く刻まれていますが、わがままをいわせていただければ村の人々と一緒に何か成し遂げる事ができたらよかったです。

### ●ネパールでの暮らしの多様性を実感

ネパールには、かねてから興味がありましたが、おそらく一生訪れる機会はないと思っていたところが、この数年、日本で暮らすネパール人が急増したこと、にわかにネパー

ルが身近な存在になりました。日本国内でネパールについて調べることももちろんできるのですが、理解しきれないもどかしさを感じていました。

スタディツアーに参加して、ネパールでの暮らしの多様性を実際に体験することができました。山村でのホームステイでは、自然と共生した生活を経験しました。特に、支援を受けつつヤギを飼育することで自立を目指す女性の話が心に残りました。カトマンズでのホームステイ、ホームビジットでは、現代的な暮らしづくりを体験しました。

山村でも都会でも、学校教育に大きな期待が寄せられていることが印象に残りました。

ホーリー祭に招待していただき、ネパールの人々の信仰心の篤さ、人間を超えた力への敬虔な祈りがあまねく行き渡つてあることに感銘を受けました。

このような傲らない態度、謙虚さ、お互いを尊重する生活の仕方を、学んでいきたいと思います。  
(富谷 玲子)

### ●子どもの貧困からの脱出には教育が大切

降るような星。厚い信仰心。温かい歓迎の数々。

カトマンズでさえ、信号がほとんどなかった。ルールが緩いための危険がある半面、解き放たれている自由さもある。

日本の60年以上前から現代までを一気に見てきたような気がした。しかし、隣人に「2時間くらいこわいガタガタ道を車で登って、標高1,600m位の村に泊まった」と言ったら、「主人の実家のある高知もそんなものよ」と言われてしまった。そう考えてみると、子どもの貧困の問題、不登校等で十分に教育が受けられないままに大人になった人たち、過疎化の問題等、共通の課題が沢山あることを改めて認識した。

私は最初、貧困からの脱出の援助について知りたいと思った。後に、日本の子どもたちが生き生きと成長するために何が必要か、考えたいと思った。だから、ネパールの子どもたちの生活を知りたかったが、それについてはあまり機会がなかった。

日本の子どものスマホ漬けが気になっている。ネパールの子どもたちにもスマホ漬けの傾向が出てき始めているようだ。出会ったお母さんたちがそれにどう対処しようとしているのか、聞けるとよかったです。

子どもの貧困からの脱出のためには、教育が大切である。十分教育を受ければ、自分の道を切り開くことができる。その意味で、地球の木の実施している支援は重要だと思う。子どもが教育を受けるためには、親がその必要性を知っていることも必要だ。ラジャバスの人たちは自分たちで学校を作ったのだから、本当に素晴らしい。このような考え方方が広く知られてほしい。  
(齋藤 好子)



チャトレビパル小学校でじゃんけんを紹介



ホーリー祭をSAGUNのマハンタさんのお宅で祝う

### ●ネパールの良さを再認識

今回のツアーで僕はネパールの良さを再確認しました。

僕は過去に2度ネパールに行き、観光地や村に招待されたこともあります比較的ローカルな良いところを実感していました。

今回行ったツアーではよりローカルな部分に焦点が当てられていたと思います。

現地でSAGUNの方の家に行ったり、村でホームステイをしたり、今までのネパールの中で最も人と人との繋がりを実感できてすごく楽しかったです。

村でのホームステイでは村の暮らしや小型水力発電やヤギの飼育活動から来る今までなかったと思われる新しい生活を垣間見ることができてこれからどうなっていくのか、良いところが失われていきはしないかと少し心配ではあるのですが、SAGUNの方から心の発展と経済の発展の説明があり、そのことを意識しているのだなと感じることができました。この説明は今まで自分が漠然と感じていたネパールと発展についての心配を言葉にしてくれた様で感動しました。

このツアーにはネパールの楽しみの一つである人と人との繋がりという部分が詰まっていると感じました。だからこそ、日本で息苦しく感じている人、日本で生きづらいと思っている人に行ってみて欲しいと思います。

(大学生 伊庭 正樹)



高校で奨学生とクイズ



# カンボジア現地調査(2/22▶2/26)

4年ぶりにプノンペンを訪れました。あちこちでビルの建設ラッシュ、街中に高層ビルが立ち並び、しゃれたカフェも増えていました。多くが中国資本だとのこと。

その一方で、中心地を外れると発展から取り残されたような、でも懐かしいカンボジアの街並みがあり、高床式の家に大勢の子どもたち、エネルギーに溢れた人々の生活がありました。

## 5年目を迎えたCWCC支援

### プノンペンのシェルターを訪問

地球の木では、毎年クラフト品の購入と支援先であるCWCC (Cambodia Women's Crisis Centerカンボジア女性緊急救済センター)の訪問を行っています。

支援を始めて5年目となるCWCCは、様々な暴力の被害を受けた女性や子どもたちのためのシェルター(避難所)として約20年前に開設されました。カンボジア全土に4カ所のシェルターを持ちDV被害者、性的被害者、人身売買等の被害者がここで一時生活をして、家庭や社会に巣立つための訓練を受けたり、場合によっては裁判を起こすこともあります。

訪問したのはプノンペンシェルターで、ここだけで年間245名の保護をしているとのこと。シェルターであるため、場所は公開されていません。周りは高い塀に囲まれ、外からは見えなくなっていますが、緑が多く小さな学校のようなところです。このシェルターはDV、性的被害にあった18歳未満の少女が多いとのことです。私たちが訪問した時も、職業訓練としてカーテンを縫ったり、お菓子を作ったりしていました。

地球の木の支援金は、巣立つ際の生活資金(生活を始めるための台所用品やお米、農業を始める資金)、医療費、シェルター内の食費、職業訓練代などに使われます。心身の傷をいやしてここを出て自立できた子は90%が戻ってこないとのこと。又その後の様子もスタッフやケースワーカーなどが訪問し、相談に乗ったりしています。



センターのスタッフから話を聞く

### 折れない心で立ち直る

今回、私たちは、280ドルの生活資金を受け取って村の家族のもとに帰ったソムナムさんを訪ねました。プノンペン市内から1時間ほど。汚れた川沿いのトイレも台所もない家に家族8

人で暮らしています。資金は新たなヤギの購入、畑の借賃、野菜の種などに充てられました。川原の土地を借りて、ヤギは10頭から40頭に増え、乳や子ヤギを売り、野菜を収穫し販売していました。この日は、CWCCのメンバーが野菜を買って、完売!

地球の木からの支援は少額(年間3,000ドル)ではありますが、訪問を重ねる毎に、私たちへの信頼も増し、この施設を出て自立したサバイバーに会わせてもらえるようになりました。

どこの国でも、女性や少女たちへの被害はなくならず、彼女たちの来た道を思うと、心がふさがれます。折れない心で立ち直る女性たちを応援」していきたいと思います。

(副理事長 成瀬 悅子)

## クラフトの生産者を訪ねる

2019年2月22日。気温6度の成田空港から37度のカンボジア、プノンペンへ。暑さとクラクションの嵐の中、私たちは多くのNGOショップを訪れ仕入れのための調査をしてきました。その中から今回は2つご紹介いたします。

1つめはPEACEです。代表のYekさんと彼女をサポートしている旦那さんの2人から、PEACEについてお話をうかがいました。

PEACEは2002年に設立されたNGOショップでカンボジアシルクの製品や環境に優しいリサイクル製品を作っています。PEACEのスタッフは地雷やポリオで障害を負った方たち、聴覚障害者の方たち、そして路上で生活をしていた母親たちです。お金渡すだけの支援ではなく、彼ら彼女たちが技術を身につけて仕事をし、自分でお金を稼ぐという自立を目指しています。実際に、自分の稼いだお金でバイクを買ったり、家を買ったりして夢をひとつづつ叶えていく姿を見ているそうです。

聴覚障害の方とのコミュニケーションでは時に困難なこと



手話が通じた!



がある、と言わわれていましたが状況に応じて、絵やスマートフォンのアプリ、手話やジェスチャーを用いて工夫をするそうです。同行した成瀬さんがある女性スタッフに手話であいさつをしたら、とても喜んで手話で応えてくれました。

2つめはFairweaveです。代表を務めるChomnabさんとシルクスカーフを織っている女性たちがいるダック島へ行きました。雨季には道が水没してしまうこの島では、農業だけで生計を立てるのが難しく、彼女たちは厳しい状況を変えるために農業、家事、育児をしながら自宅でスカーフを織っています。根気と集中力が必要な織りですが、話をうかがったどの女性たちも織りの仕事が好き、と言っていました。生活のための現金収入を得られることだけではなく、働くことに喜びを持っていました。

同行した通訳のDinaさんは「最近、NGOと言ひながらビジネス重視のところもある。しかし、今回訪れたNGOは弱い立場にある人たちを同僚として受け入れ、正当な賃金を払っている。彼らのようなNGOをもっとサポートする仕組みがあるとい

い」と感想を教えてくれました。すべてがうまく回るのは確かに難しいけれど、少しでも良い循環ができる、それが少しでも長く続くようにこれからも応援したいです。

(クラフト担当スタッフ 竹内 千佳)



織の仕事が好き!



## 頭の中で ぐるぐるしているもの

地球の木で活動することになったきっかけは、今から20年前、ある縁で当時の事務局長、飯田信子さんと出会ったことです。

当初私は、某国連機関の広報ボランティアをしていましたが「かわいそうな人々のためにお金を寄付しましょう」的な何となく上からの感じに違和感を感じていました。その違和感が何だったのか、地球の木でフィリピンのネグロスやラオスの村を訪問する中で、はっきりしてきました。途上国の貧困問題は、「自分たちとは違う世界のかわいそうな人々の問題」ではなく「問題は私たち先進国の暮らし方につながっていて違う世界のことではない」ということ。そして「かわいそうな人々でなく同じ人間だ」ということでした。

ネグロスの村人は、決して悲しい目をして日々を過ごしてはいない。生き生きとして、家族や地域で助け合い笑い、逞しく誇らしげにみえた。ラオスの村人は穏やかで、豊かな森と共に「足るを知る」生活をしている。エネルギーや便利さを使いたい放題の私たちとは程遠い生活なのに! ふと振り返れば、自分の方が「お金やモノにしばられて、豊かさの勘違いをしたためにダメになった、逆にかわいそうな人」なのだ。彼らから、人間は自然の一部であり、モノやお金が無くても生きていいくためのいろいろな力があるということに気付かされる。そして「本当の豊かさとは?」というテーマが以来ずっと、頭の中でぐるぐるしています。

今、自分の目標はラオスの豊かな森と、その森が失われつつある現状を何とかカタチにして伝えたいということです。

(横浜市緑区 武安 ますみ)

## 活動日誌(3月～5月抜粋)

### 3月

- 4日 第10回理事会
- 5日 出前講座  
(練馬区立光が丘四季の香小学校)
- 15・16日 デポー展示会(ほんもく)
- 15～24日 ネパールスタディツアーリ
- 25日 第2回臨時理事会
- 25・26日 デポー展示会(東寺尾)
- 30日 ちがさきサポセンワイワイまつり

### 4月

- 6・7日 デポー展示会(たかつ)
- 10・11日 デポー展示会(すすき野)
- 13日 地球の木講座「甘い/バナの苦い現実」上映会&トーク
- 15日 第11回理事会
- 22日 監査
- 22・23日 デポー展示会(南林間)
- 30日 第3回臨時理事会

### 5月

- 11日 出前講座  
(横浜市立平楽中学校)
- 13・14日 デポー展示会(緑園)
- 25日 第20回地球の木総会
- 27・28日 デポー展示会(市ヶ尾)



## \* 会員様向けの通信販売を初めて行います! \*

カンボジアのシルクスカーフやバッグなどの商品を7月末までの期間限定・数量限定でお届けいたします。「うちの近所にはデポーがなくて。」「地球の木が出店するイベントとタイミングが合わなくて。」と今まで地球の木のクラフトを手にする機会がなかった会員のみなさま、このチャンスをお見逃しなく。カンボジアの女性たちが丁寧に作り上げた気持ちも一緒に受け取

ってください!ご自分へのご褒美に、お友達やご家族へのプレゼントにご検討いただけると幸いです。詳細は別紙をご覧ください。(クラフト担当スタッフ 竹内千佳)



### デポー展示会

6月15日(土)	東戸塚
7月10日(水)	ほんもく
11日(木)	〃
8月5日(月)	つなしま
6日(火)	〃



### ネパールスタディツアー2019報告会

「幸せ分かち合いムーブメント」の支援地を訪れたツアー参加者は、村の人々と触れ合い、どんな体験をしたでしょう…。

- ◆ 日 時 : 6月23日(日)13:30~15:30
- ◆ 場 所 : 平沼記念レストハウス(横浜文化体育館付属施設)
- ◆ アクセス: JR関内駅南口または横浜市営地下鉄伊勢佐木長者町2番出口より徒歩5分 ◆ 資料代: 300円

\*お申込み: お電話・FAX・Emailで地球の木事務局まで

### 映画＆トーク会

#### ～参加者感想～

バナナという身近なテーマに魅かれてという方や、また甘いバナナ・苦い現実というちょっと不思議なタイトルが関心を呼んだのか、10代から70代以上まで各年代にわたり、会場満席の60名もの参加者を迎えて行われた映画＆トーク会。いろいろなことを参加者の皆さんに考えていただけた会であったようです。お寄せいただいた感想から。

#### ■安いバナナは魅力だが

参加者の多くからいただいた感想は、安いバナナは魅力。バナナが何故こんなに安いのか、安くなったのか、普段から疑問だったが、その秘密がわかったとのこと。それは外国資本による生産者の過酷な労働のもとに成り立っているということを知り、愕然とした人が多かったようだ。そこに日本企業もかかわっていることを知り心苦しさを覚えた人達も。全く知らなかつたバナナ栽培の現状と問題点が分かり新たな視点を持ったとの感想。

#### ■私たち消費者は

見映えや安さだけで買っていたことへの反省、農薬を散布されたバナナを食べることの不安。安全なバナナを手に入れるにはどうすればいいのか。消費者として何ができるか、何をすればいいかという疑問が多かった。バナナだけではなく、今の食生活全般への反省

も。遠く離れた地域の食べ物を求めることが問題なのではとフードマイレージにも言及。エシカルな購買を促すには教育が必要との意見が。

#### ■生産者への同情

農薬による水質汚染、体調不良を訴える生産者。そこでは生産者の大きな犠牲が払われている。被害に遭った生産者の生活が気になる。便利で豊かな生活は、誰かの犠牲の上に成り立っていることを再認識。生産者と消費者の分断はどうにかならないのか。

#### ■フィリピン政府の対応

フィリピンの労働環境の悪さは知っていたが、農薬空中散布やプランテーションの害については知らなかつた。外国企業が自国民に苦痛を強いていることに関して政府の対応はどうなのかと憤り、政府は国民を守る法を作り、規制すべきという踏み込んだ意見があった。

#### ■映画に関して

わかりやすかったという感想がある一方、全て大切だが多岐にわたっていて印象が薄くなつたくらいがとういう声もあった。

～講師の話がわかりやすく、バナナという身近なものから世界、環境、人権、差別まで考えさせられた。得られた知識が多く、今後も伝える必要あり。上映を勧めたいという評価をいただいた～

(会報作成チーム 浜辺美英子)



特定非営利活動法人  
**地球の木**



年号が平成から令和へとにぎやかに変わりました。地球の木が生まれたのは1991年。数えてみると、それって平成3年ということだったんですね。いつも西暦表記のみでやっているので、年号ではちょっとピンときませんが、「令和」でも地球の木の活動、そして会報は続していくのです。(Y.N.)